

# ディスアビリティのエスノメソドロジー

## ——精神障害・発達障害当事者との連携について——

三重県立看護大学 浦野 茂

### 1 目的

この報告の目的は、精神障害・発達障害に対するエスノメソドロジーの関係を明確にし、これを通じて障害をもつ当事者と社会学との連携のひとつのあり方を展望することである。

### 2 背景

エスノメソドロジーは精神障害・発達障害とどのような関係にあるのか。かつて H. ガーフィンケルは、社会学的視点の意義を精神科医に向けて紹介した論文において、精神科医自身もある社会学的推論を用いていることを指摘していた(Garfinkel, 1953)。たとえば診断は、人物の状態についての医師の行う判断である。診断の対象は、ある個人である。しかしこの障害について身体的指標や状況超越的な基準となる行動パターンが特定されていないことを考えると、この診断は状況依存的であらざるをえない。したがって、個人についての精神障害の診断が可能なのは、その人とその振る舞いを具体的な社会的状況において捉えるからなのである。すなわち、その状況を作り上げている自明視された規範を利用することにより、そこからの逸脱として障害の診断は可能になっているのである。

この論文におけるガーフィンケルの指摘は、いわば「図」にばかり目を向けがちな精神科医に、「地」の存在を指摘するものだった。しかし彼のアプローチを引き継ぐ者たちは、この地じたいがどのように組み立てられているのか、より積極的な解明を進めてきた。精神障害について、その特性（あるいは症状）がそれとして観察可能にする社会的状況の組織方法、すなわち精神障害のエスノメソッドが明らかにされてきたのである（Blum 1970, Coulter 1973, Frankel 1982）。

### 3 論点

精神障害のエスノメソドロジーについてそれを明らかにすることの意義は、ひとまずコインの裏表のような二点を挙げるができるように思う。第一は、自明視された社会的状況の組織方法を、精神障害という現象を契機とすることによって可視化することである。障害という契機を通じ、様々な実践を構成する方法的資源とその可能性を明らかにすることである。第二はこうした方法的資源を、実践におけるその使用が障害を観察可能にしているという意味においてバリアとして捉え直し、その制約を明らかにすることである。

こうした二つの作業はいずれもが障害をもつ当事者の知識にもとづいて進められる必要がある。様々な実践におけるバリアの認識を出発点としているからである。そしてまた、そこで明らかになることが、障害をそれとして観察可能にするバリアであり、したがってそれを消去する方法的資源の開発に結びつきうるという意味において、当事者のために進められる必要がある（浦野・綾屋・青野・喜多・早乙女・陽月・水谷・熊谷, 2015）。

### 文献

- Frankel, Richard M., 1982, "Autism for all practical purposes," *Topics in Language Disorders*, 3(1), 33-42.  
Blum, A., 1970, "The Sociology of Mental Illness, Douglas, J. D., ed., *Deviance & Respectability*, Basic Books, 31-60.  
Coulter, J., 1973, *Approach to Insanity*, John Wiley & Sons.  
Garfinkel, H., 1956, "Some sociological concepts and methods for psychiatrists," *Psychiatric Research Reports*, 6, 181-195.  
浦野 茂・綾屋紗月・青野 楓・喜多ことこ・早乙女ミナリ・陽月トウコ・水谷みつる・熊谷晋一郎, 2015, 「言いつばなし」